

少女雑誌の部屋から

現在発行されている少女漫画雑誌の一部には、少女雑誌の流れをくんでいるものがあります。例えば、おなじみの『なかよし』や『りぼん』は昭和30(1955)年に創刊しましたが、当時は現在のような漫画雑誌ではなく、絵物語やグラビアなどもあわせて掲載する総合的な雑誌でした。次第に漫画の占める割合が増えていき、昭和33年頃から漫画をメインとする誌面構成となりました。漫画の黎明期を研究する上においても、少女雑誌は欠かせない存在なのです。



雑誌紹介 15

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

新少女 (婦人之友社) 大正4(1915)年4月号～大正8(1919)12月号

日本初の女性ジャーナリストであり、「自由学園」創始者のひとりである羽仁もと子が創設した婦人之友社から出版された雑誌。『子供之友』の姉妹誌。挿絵画家の竹久夢二が創刊号から編集局絵画主任として協力し、表紙をはじめ、口絵、連載ものの挿絵なども手がけた。

執筆者は与謝野晶子、山田邦子、秋田雨雀ほか多数。羽仁もと子は「新少女伝」、「質問に答ふ」などを連載した。

少女の豊かで健全な生活と思想の育成に努め、美しい理想の雑誌づくりを目指した。大正期の少女文化を知る上で、貴重な雑誌である。

少女雑誌を彩った挿絵画家たち 15

東郷 青児 (とうごう せいじ) 1897-1978

鹿兒島生まれ。本名は鉄春。

少年時代に竹久夢二の下絵描きをするという経験を経て、ドイツ留学から帰国したばかりの作曲家・山田耕筰から西欧での新しい美術運動を学ぶ。19歳の時、二科展に初めて出品した《パラソルさせる女》が初入選し、二科賞も受賞。前衛画家として華々しくデビューを飾った後、24歳でフランスに留学し、7年後に帰国。「大衆に愛されるわかりやすい芸術」を生涯の目標に掲げ、夢見るような抒情的な美人画で多くのファンを魅了した。

少女雑誌では『令女界』、『白鳥』、『少女の友』や『女学生の友』にも挿絵を描いた。昭和53(1978)年、旅先の熊本で逝去。享年80歳。

東郷青児の作品を観るには・・・SOMPO美術館(東京都新宿区)
喫茶ソワレ(京都市下京区)

少女雑誌の豆知識

雑誌の中に見る巨匠

少女雑誌には、挿絵画家だけでなく、棟方志功のなかたしこうや東郷青児など、たくさんの有名な画家たちが挿絵を描いています。戦中戦後、雑誌の挿絵を描くことは画家たちにとっても貴重な収入源だったと考えられます。テレビなどがなく、情報伝達の手段が限られていた時代、雑誌の存在は大きなものであり、作品を発表する貴重な機会のひとつでもありました。川端康成、山本周五郎などの著名作家たちも執筆していました。遠い存在だった巨匠たちの作品を「雑誌」という形態で手元に置いて見ることができたのは、今となってはとても贅沢なことですね。